

〈史料紹介〉

東京府文書 「府治類纂 地輿」 (その六・完)

横山 百合子

史料紹介「東京府文書「府治類纂 地輿」(その五) (『千葉経済大学論叢』四四号所収) に続き、東京府文書「府治類纂 地輿 第十七冊」(東京都公文書館所蔵 東京府文書、請求番号 634.44.17) のうち、目次番号八十九、九十五の記事を紹介する。凡例は、(その一) を参照されたい。

『八十九』

『己巳十一月伺済』

当府附猿若町式町目地面式ヶ所受負人喜三郎義、明地多、殊諸入用相嵩、上り高引足兼候二付、受負御免之義別紙之通申出候間、取調候処、事実無相違相聞候間、願之通受負差免、跡拝借人等有之候迄、式ヶ所共町年寄共へ預り置、地代取立月々町入用支払、残金為相納、且受負御免相願候後、去辰七月より当十月迄之分八、見取勘定を以町入用差引残金為相納可申哉

一、同断同町老町目・同式町目・同三丁目地面受負人伊八儀、病死いたし、跡相続可致もの無之旨、別紙之通申出候間、是又前書同様追而拝借人等有之候迄、町年寄共へ預け置、地代取立月々町入用支払、残金為相納、且伊八病死後は、辰八月より当己巳十月迄之分、見取勘定を以町入用差引、残高相納させ可申哉、相伺申候

巳十一月

『九十』

『巳巳十一月』

佃島之儀は、元海地二而、旧幕府より受領致シ自分入用を以築立住居いたし、其後元録年中申立候上、沽券状二いたし所持罷在候処、今般土地相成候二付而ハ、地主其外一同及難儀候間、金五百兩二而惣坪数三千七百八坪買下之儀、同所惣代宇右衛門外三人より願出候取計方之儀、相伺申処、右は自分入用を以築立、殊ニ沽券状迄も拵有之候上は、仮令買下之儀願出候とも、右を御取上ケ可相成筋ニは無之候間、改而、右地所是迄所持之もの共え其儘被下置候旨被仰聞候付、右宇右衛門外三人え之被仰渡書案取調、相伺申候、且右願書之内ニ、獵業場所又は深川佃町助成地并借地之分とも上地いたし、猶受負之儀等相願候得共、右等之廉は別段可願出旨申渡、願書差戻候様可仕候

巳十一月

『巳巳十一月』

佃島惣代 宇右衛門

善右衛門

むめ後見 長五郎

岩太郎

其方共住居致し候地所三千七百八坪、今般改而被下候間、町役其外之義は都而是迄之通可心得

右 中添年寄

町年寄

右之通申渡間、其旨可存

巳十一月

『己巳十二月九日』

乍恐以書付奉願候

一、佃島地主惣代宇右衛門外四人申上候、私共住居仕候地所三千七百八坪、前々之通今般改而被下置候旨被仰渡、冥加至極難有仕合奉存候、依之、為御国恩金貳百兩献金仕度奉願上候、聊之御儀ニは御座候得共、何卒以御憐愍願之通被仰付被成下置候様、一同奉願上候、以上

明治二巳年十二月

佃島地主惣代

願人 宇右衛門

外 四人印

町年寄

專 蔵

東京府宛

同日願之通献納申付之

『九十一』

乍恐以書付奉願上候

一、昌平橋外本郷五丁目代地利三郎地借庄兵衛、下谷長者町老目松五郎地借彦兵衛外四人奉申上候、御国政御一新之御趣意奉恭承、私共一同安穩ニ永住可仕と難有仕合奉存候、然ル処、御為筋等心付候儀ハ、何事ニ不寄貴賤

不論無忌憚可奉申上旨、度々御布告被為在候二付、為報国之御益筋二可相成廉奉申上御奉公仕度、種々愚考仕候
処、御曲輪外、御見付外等二是迄御住居被為在候御武家様方、当夏中より夫々御立退有之候内、下谷和泉橋通り
御徒町入口より北之方加藤遠江守様御屋敷先三枚橋際迄、両側凡拾町程も有之候処之御武家方、駿州え御移住又
は帰田上土地等二而、過半は御立退有之候二付、跡建家御取払之上、明屋敷地多分有之、且又御売払之家作其儘二
而買取候者も有之候処、追々商店相開、種々之品売買二而繁栄相成候二随ひ、諸町より商人共右御徒町之内え引
越、諸品売買二而、此節は凡店八九拾軒も出来、夫々渡世罷在候、然ル処、元々御武家方御住居跡之事故、家守
は勿論、取締向等致世話候者も無之、銘々勝手自儘二而、第一火之元之締も相立不申、甚猥リ二付、御大病院御
医学所御地続故、右御役所二而拜借地二相成候ハ、其御下受負仕度旨奉出願候処、当御裁判所え被召出、御大
病院方え奉願出候儀は筋違、不都合之儀蒙御利解、殊更御武家方御興廢御所置之儀は、格別御手負^{具カテ}之儀可被為在
旨被仰渡、旁以自己之出願不調法至極、重々奉恐入候、右は、御一新之御趣意二基御奉公筋もと奉存候精心、不
得止事、恐をも不顧奉出願候、前書奉申上候通、和泉橋通御徒町え諸町之商人引移商売仕候儀、未御免之御沙汰
も無御座候処、御武家方御立退之砌、夫々家作造作等御売払二而、買取候者共一己之存意を以、当時住居候商人
共より地代店賃取之、諸品売買為致候得共、火之元守方其外非常異変等之節弁別可仕様之町法相立不申、自儘之
取計而已と及承候二付、乍恐御興廢御手員之御所置御取極被為在候迄、当分之内右町々住居候商人共之取締、且
は火之元守方非常異変等有之候節、惣而其仕儀都度々々御訴奉申上候取計世話方、私共え被仰付被下置候様奉願
上候、右は追々御興廢御所置御治定之上は、受領地御差除、其余商人住居私共え御請負方之儀、御仁恵之御許容
御座候節は、夫々蒙御見分を、御地代上納方、坪数二応し御引渡被仰付候翌月より上納仕、尚一般商人住居弥以
御免之上は、表裏坪数巨細奉申上、御地代上納方は勿論、町法規則相立、家守之者共も相増、非常防方等嚴重相
守、日々追而繁栄可相成様精勤仕、尚明地之分は、夫々家作建家等は町並見苦敷無之様補理、安直二貸渡候得は、

新規開業之町柄故、住居候商人共猥々間敷儀無之様添心仕、何品ニ不限正路実直ニ渡世可致様教諭仕候得は、住居人共不及申上、私共ニ到迄挙而御国恩奉尊仰、一同友励ニ而後栄を相計候儀ニ付、万代不益之御仁政、一統難有仕合奉存、精勤可仕候間、何卒出格之以御慈悲を、右願之通り被仰付被下置候度、則鈍絵図面相添奉差上候間、此段幾重ニも御聞濟之程奉願上候、以上

明治元辰年十二月

昌平橋外

本郷五丁目代地

利三郎地借

願人

庄兵衛

下谷長者町壺町目

松五郎地借

同

彦兵衛

本所亀沢町清右衛門地借

同

卯兵衛

馬喰町貳町目

久兵衛地借武左衛門方同居

同

正助

右願人四人惣代

訴訟人

庄兵衛

同

彦兵衛

東京府御裁判所

和泉橋通

里俗下谷御徒町西側

南角

繁蔵拝借分

間口拾四間三尺余

裏巾同斷

裏行

南三十壹間三尺
北拾九間四尺余

此坪 三百余

地代壹ヶ月

銀三百五十匁七分四り四毛

同統式軒目

間口二拾四間六尺

一、裏巾折廻二拾四間余

卯兵衛拝借分

裏行

南拾九間四尺余
中四間
北一丁式間

此坪 五百坪

地代壹ヶ月

銀四百拾九匁

表坪之内井戸路次雪隠坪

壹割引

六拾五坪貳合五勺

壹坪二付銀貳匁四分三厘

横町同 壹割五分引

七拾坪壹合貳勺五才

壹坪二付銀壹匁五分

裏坪 同式割引

百六坪

壹坪二付銀七分五厘

表坪同壹割引

百拾壹坪七合四勺九才

壹坪二付銀貳匁

裏坪同式割引

三百坪六合六勺八才

同斷銀七分五厘

同統三軒目

間口拾八間五尺

一、裏幅折廻し拾九間一尺余 庄兵衛拝借分

裏行

南拾二間
中十四三尺余
北三十二軒三尺

表坪同断

八拾四坪七合五勺 壹坪二付銀貳匁

此坪 五百坪余

地代壹ヶ月

裏坪同断

三百二十五坪四合六勺七才 同断銀七分五厘

銀四百拾三匁

同統四軒目

間口拾七間余

一、裏巾折廻し拾七間一尺余 弥次兵衛拝借分

裏行

南三拾三間三尺
北二十七間

表坪同断

七十六坪五合 壹坪二付銀貳匁

此坪 五百三十二坪余

裏坪同断

地代壹ヶ月

銀四百二十壹匁式分 同断二付銀七分五厘

同統五軒目

間口拾八間三尺余

一、裏巾同断

甚右衛門拜借地

裏行 二拾七間

表坪同断

此坪 五百坪余

八十三坪式合五勺 壹坪二付銀式匁

地代壹ヶ月

裏坪同断

銀四百拾壹匁

三百廿六坪 同断銀七分五厘

同統六軒目

間口拾八間三尺余

一、裏巾同断

彦兵衛拜借分

裏行 二十七間

表坪同断

此坪 五百坪余

地代壹ヶ月

裏坪同断

銀四百拾壹匁

同統七軒目

間口拾八間三尺余

一、裏巾同断

初五郎拜借分

裏行 二十七間

表坪同断

此坪 五百貳坪余

地代壹ヶ月

銀四百拾壹匁

裏坪同断

同統八軒目

間口拾八間三尺余

一、裏幅拾八間三尺余

裏行 北南 二十七間
二十六間五尺

此坪 五百坪余

地代壹ヶ月

銀四百拾壹匁

源兵衛拝借分

表坪同断

裏坪同断

同統九軒目

間口拾九間

一、裏幅拾九間

裏行 北南 二十六間五間
二十六間

此坪 五百坪余

地代壹ヶ月

銀四百十四匁

清兵衛拝借分

表坪同断

八拾五坪五合 壹坪二付銀貳匁

裏坪同断

三百廿四坪余 同断銀七分五厘

北角

間口拾壹間三尺余

一、裏幅同断

庄助拝借分

裏行十六間

表坪同壹割引

此坪 三百坪余

五十壹坪七合五勺

壹坪二付銀貳匁四分三厘

地代壹ヶ月

横町同壹割五分引

銀三百四拾貳匁貳分貳厘七毛

九拾九坪貳合五勺

壹坪二付銀壹匁五分

裏坪同貳割引

壹坪二付銀七分五厘

右地所、願之通私共拜借地ニ被仰付難有奉存候、然ル上は、町役其外都而町並之通相心得、書面地代之内月々町入用仕払、殘金年々七月十二月兩度ニ、当御府出納御局え無相違上納可仕旨被仰渡奉畏候、為後日、仍如件但地代之儀は、来午六月分より可相納旨被仰渡奉畏候

浅草(マ)淡島町

差配人

繁 蔵

本所亀沢町

清右衛門地借 卯兵衛

神田旅籠町貳丁目

利三郎地借 庄兵衛

葺屋町

組合持地借 弥次郎

本所柳原三町目

家持 甚右衛門

代 甚之助

下谷長者町壹丁目

松五郎地借 彦兵衛

神田旅籠町三町目

藤七地借 初五郎

神田松永町

差配人 源兵衛

深川東海辺大工町

金次郎地借 清兵衛

馬喰町貳丁目

久兵衛地借

武右衛門方同居

庄 助

此度新規拜借町地ニ被仰付候和泉橋通里俗御徒町之儀、町規取扱向左之通奉伺候

一、右場所之儀、三拾貳番組統ニ付、同組え附属、私共支配と相心得可申候哉

一、町銘之儀、神田松永町統ニ付、同町貳町目と相唱可申哉

一、町年寄之儀、追而人撰差定候迄は、隣町神田松永町々年寄ニ而差向兼勤致し候様取計可申哉

一、當時在来之町人其外共、人別取調、戸籍え差加へ可申候得共、朝臣又は諸藩等之面々は、町並之地代差出、当分住居いたし度旨申立候分は、市中外並之通、町人之請人取之差置不苦儀ニ可有御座候哉

一、町入用出銀之儀は、六ヶ月程相立、七ヶ月目より、同組聞小間ニ差加え出銀いたし候様取計可申哉

一、町火消之儀は、八番組之内加組へ加入、尤人足は不差出、出入用而已七月目より右同様出銀方取計可申哉

一、道式之儀、東南北三方道幅央ヲ境界ニ相定、異変其外町年寄ニて進退可為仕哉

一、御地所之儀、御下ヶ絵図面之通南角より十ヶ所十番迄番附いたし、今般取調候同組沽券地図ニ差加え可申哉

一、番役之儀は、猶談判之上申上候様可仕候

右廉々奉伺候、以上

三拾貳番組 中年寄

片岡 二左衛門

添年寄

益田 金 六

可為伺之通事

『九十二』

『己巳十二月十九日小印濟』

拾六番組外四組年寄共より伺出候元代官地之場所、先般市中え組込相成候二付、地位等相糺夫々甲乙共有之候得共、一円町並之通聞小間ヲ以町入用差出候二付而は、如従前年貢諸役錢も差出候様二而は、別而難渋いたし候間、年貢諸役納方は御免除被下度旨願出、勘弁仕候処、右は旧幕府之節も両端之入用差出、年貢も納来候儀二有之候得は、市中二相成候上は、明地と雖地位ヲ定、町入用差出候儀二付、出銀相嵩事实難儀可致哉二付、是迄之通、年貢ハ出納局え為相納、諸役錢之儀は免除可被成下哉、相伺申候也

十二月十八日

元代官地町並屋敷之分、区内百姓地、武家抱屋敷、寺院持添屋敷同様、是迄納来候年貢諸役共、拾ヶ年平均之割合ヲ以、区内年寄共え取集メ、毎年十二月廿日限当巳年より年々出納方え上納可仕旨御沙汰之趣奉畏候、私共区内町々地主共え申聞候処、過半元代官地二有之、先達而区別相定、已来地代上り高ニ而町入用聞小間取極候二付、地位甲乙相立居候得は、町並諸役一般之振合ニて相勤候二付、場末町々之内ニは、是迄之町入用掛高より相増候向も有之候処、今般年貢諸役前々之通り相納候儀、疲弊之町々多、行届兼難渋仕候間、五拾区並之公役被仰付、年貢諸役之儀は御免除被成置候様奉願度旨申出候得共、御沙汰被為在候儀出願為仕候も奉恐入候間、此段御内慮奉伺候、以上

巳十一月

拾六番組

拾七番組

拾八番組

拾九番組

貳拾番組

中添年寄共

世話係年寄共

先般市中之區別被差定候ニ付而は、元代官地之場所明地と雖地位相糺、夫々甲乙は有之候得共、一円町並之通間小間ヲ以町入用差出、如從前年貢諸役錢差出候而は、場末之町々兩端之入費相嵩難洪之趣ニ相聞候間、自今諸役錢納方は被差止、是迄納來候年貢は、当巳年より当府出納局之可相納候、尤町入用差出方之儀は、是迄之通可相心得候右之通、元代官地ニ而當時市中ニ相成候町々之可相達候事

十二月十九日

右之通被仰渡元代官地ニて市中之場所之可相達旨、奉畏候、為其仍而如件

巳十二月十九日

村田又 夢

星野又右衛門

夏目小兵衛

『九十三』

『巳巳十二月九日達又同廿六日挨拶來ル』

元銀座人

室賀儀右衛門、勝間官次所持

桶町壺町目北側東角

一、表京間五間半

裏行拾九間半

沽券金千兩

同

勝間官次栗田源三郎所持

南佐柄木町九番

表間口拾三間半

一、裏行二十卷間四尺貳寸

裏巾拾貳間

沽券金千五百兩

右桶町地面は、文化十三年、南佐柄木町は同十四丑年中、右兩人名前ニ而買求、其後沽券狀繼書も不致、是迄所持罷在候処、此節桶町は当時貨幣改所勤元木吉右衛門売主、新庄三郎次郎請人にて、南佐柄木町之方は前書勝間官次より四代目同勤勝間佐七郎、同断栗田元三郎より右地面外え売渡旨申出候由、然処、右地面兩人名前ニ而所持いたし居候は、已然銀座役所金ニ而買求候儀ニは無之哉、左候得は役所附之地所ニ付、自儘ニ売券難相成候間、其段右町々中添年寄共より申談候処、座方相勤候者共仲ヶ間合ニ而買受候地面故、兩人名前ニて所持致し候得共、座方附ニは無之旨申聞、何分事実難差極趣ヲ以右年寄共より伺出候、右は銀座方附之地所ニは無之、勝手ニ売券相成候而も差支之筋は無之哉、其向御取調否早々御申越有之度、此段及御掛合候也

巳十二月

東京府

大藏省御中

御書面元銀座人売券之儀、相糺候処、銀座人共全永統之為メ買入候地所之旨、別紙之通申立候ニ付、猶取調候処、役所金ニ而買候儀旧記類無之候、此段及御挨拶候也

十二月

大藏省

一、当十二月九日御達之趣二而、桶町壺町目、南佐柄木町地面之儀二付、東京府え右町々中年寄より御伺二相成候趣、左二御答申上候、右地所并靈岸島銀町貳町目壺ヶ所、西久保巴町貳ヶ所、文化十三年同十四丑年兩年二、元銀座人共積金之内を以一同永統之為メ買得仕置候儀二而、元銀座附と申儀二は聊無御座候、右名前之儀は、其割^(期)右地所周旋致し候者二付、沽券名前人二致置候儀二御座候、依之此段御尋二付奉申上候、以上

已十二月

泉谷 次郎右衛門印
大黒 作右衛門印

元銀座人室賀儀右衛門外三人所持桶町壺町目外壺ヶ所地面、売券相成候而も差支無之哉、其筋御糺御申越有之候様、先達而及御掛合置候処、未夕御挨拶無之、右は早々御回答有之度、尚又此段及御掛合候也

十二月廿日

東京府

大蔵省御中

桶町壺町目北側東角

旧幕府銀座人

一、表京間五間半
裏行拾九間

室賀 儀右衛門
勝間 官 次

沽券金千兩

右地面之儀は、五拾四ヶ年以前、文化十三年十二月、右両人名前二而買求、其後沽券狀継書も不致是迄所持罷在、当時貨幣改所勤元木吉右衛門と申者売主、新庄三郎次郎と申者証人二而、今度右地面外二売渡度旨申出候、然

ル処、右地面兩人名前ニ而所持致し候は、以前銀座役所金ニ而買求候儀ニは無之哉、左候得は役所付之地面ニ付、自儘売券難相成候間、其段申談候処、右は座方相勤候ものとも仲間合ニ而買受候地面故、兩人名前ニ而所持致し候得共、座方附地所には無之旨申聞、何分事実難差極、右は金座方付等之地所ニは無之哉、奉伺候、其御筋え御掛合被成下置候様奉願上候、以上

已十二月晦日

九番組 中添年寄共

書面之地所売券相成差支無之候事

南佐柄木町

九番

旧幕府銀座人

表間口拾三間半

勝 間 官 次

一、裏行廿壹間四尺貳寸

栗 田 原 三 郎

裏巾拾貳間半

此坪 貳百八拾貳坪壹合

沽券金 千五百兩

右地面之儀、五拾三ヶ年以前、文化十四丑年十二月中、右兩人之名前ニ而所持致居、其後沽券状繼書も不致、是迄兩人之ものより四代相替、当時貨幣改所勤勝間佐七郎、栗田源三郎と申者代ニ相勤居候処、今般右地面売渡度旨申出候、然ル処、右地面兩人名前ニ而所持致候ハ、已然銀座役所金ニ而買求候儀ニは無之哉、左候得は役所附之地面ニ付、自儘売券難相成候間、其段申談候処、右は座方相勤候者共仲間間金ニ而買受候地面故、兩人名前ニ而所持

いたし候得共、座方附地面等ニは無之旨申聞、何分事實難差極、右は金座方付方之地所ニは無之候哉、此段奉伺候、其御筋え御掛合被成下置候様奉願上候、以上

巳十一月十三日

拾三番組 中添年 寄共

書面之地所売券相成差支無之候事

『九十四』

『巳巳十二月十四日』

深川扇橋町壺町目同貳町目地先河岸地

一、惣坪千三百拾壺坪三合壺勺

内

百七拾三坪 是迄地代上納仕来候分

残

千百三拾八坪三合壺勺

地代壺ヶ月

銀百拾三匁八分三厘壺毛

但 壺坪二付銀壺分宛

右は、今般願之通私共え拝借被仰付候ニ付而は、外河岸地並之通相心得、定住火焚所等ニは決而不仕、都而不取締之儀無之様致し、書面之地代毎年七月十二月兩度ニ当御府出納局え上納可仕旨被仰付、奉畏候、為後日、仍如件

深川扇橋町壹丁目

同式丁目

地主惣代

差配人 金 兵衛

町年寄 名前略ス

明治二巳年十二月十四日

『九十五』

『巳巳十二月十七日』

書面八幡町之儀は、裏行無之、住居人致迷惑居候趣ニ付、中年寄共調書絵図面飛朱之通、同町え困込町地ニ申付、町入用其外並之通相勤候様可申渡哉、此段相伺申候

十二月

乍恐以書付奉願上候

一、当社八幡宮は、無祿社頭ニ付、近年諸種格外之高直ニ相成、社務相統難行届候ニ付、当三月中神供所再建致し住居ニ仕度段奉願上候処、御聞濟被成下難有仕合ニ奉存候、同所出来候間、其節御届申上、元屋敷えハ番人附置、当時神供所住居ニ罷在候、幸当門前市谷八幡町裏行無御座候、住居人兼而難洪罷在候間、社務為相統別紙絵図面朱引之地所貸地ニ仕、右八幡町え合併致し、町年寄支配ニ被成下候ハ、町入用并諸掛り等割合之通り差出可申候、然ル上は、社務相統之助成、殊ニ門前町之者弁別(例カ)ニも相成候間、何卒格別之以御慈悲、此段御聞濟被成下候様、偏ニ奉願上候、以上

明治二巳年十一月

市谷亀岡八幡神主

東京府御役所

亀岡道 住

市谷亀ヶ岡八幡神主亀岡道住より、同人元住居地市谷八幡町裏統二付、町家作地二貸附、同町え合併致し、町入用其外諸掛り町規通差出、町年寄進退ニ致度旨奉願候二付、差支有無御尋御座候間、取調、左ニ申上候

右八幡町之儀は、一体裏行無御座、住居人共都合不宜場所二付、町屋統家作地ニ相成候方弁利宜敷、差支筋無御座候得共、道住より奉願候通、同人住居跡明地不殘町地ニ相成候而は、地所境界曲折煩敷御座候間、在来町屋尻凡式拾間位に相定、右坪数町並地代見競、地位甲乙相立格合相定、聞小間ヲ以町入用其外差出、町規相守候得は、八幡町ニ而も助成ニ相成候儀二付、聊差支筋無之趣ニ相聞申候

右御尋二付、別紙絵図面相添、此段申上候、以上

巳十二月

島田藤 一

市谷八幡神主

亀岡道 住

其方儀八幡社門前八幡町之儀は、裏行無之、住居人迷惑致二付、右町屋敷裏明地同町え閉込、町地ニいたし度段願出ルニ付、糺之上内、三百七拾坪余、願之通町地ニ申付ル

但町役其外並之通可相勤

右之通被仰渡奉畏候、為後日、依如件

右 亀岡道 住印

市谷八幡町

中年寄 島田藤 一印

市谷八幡町統裏手神主亀岡道住元住居跡明地、町家作相願候二付、同町え見競、地位凡格合左之通

一、惣坪 三百七拾坪余

内 壹ヶ月

表坪式拾坪 同 但 壹坪二付 銀壹匁六分五厘

裏坪三百五拾坪余 同 但 同二付 銀七分五厘

表裏地代平均

壹ヶ月

百坪二付 銀七拾九匁八分六厘

右は、市谷八幡町沽券地、表坪平均壹ヶ月地代三匁三分、裏坪壹匁五分二相成候二付、右え見競崖下地位不宜候間、五割劣りニ而、前書之通地代格合相当可仕候奉存候

右御尋二付、別紙絵地面相添、此段申上候、以上

巳十二月

島田藤 一

〔九十六〕脱カ)

『巳巳十二月廿五日 本文之方ニ取計可申旨鮫島誠藏殿御談二付、翌廿六日、一同冥加金上納之義は不被及御沙汰旨申渡ス』

両国橋東西橋番并水防受負人共儀、同橋東西広場助成ヲ以、橋番所新規修復、番人給分、出火出水防方、其外右橋

附之用向相勤來候處、今般諸向御改正ニ付而は、右助成地之儀は従前之儘被差置度、左候得は其日稼之もの共營業ニも不相離難有奉存候ニ付、右為冥加年々金貳百五拾兩ツ、上納いたし度段、願之趣勘弁仕候處、右は永代橋外貳橋東西助成地定住家作地ニ被仰付候ニ付、両国橋之儀も同様ニ可被仰付哉と見越、右様願出候儀と相聞、素より右場所は家作地ニ可被仰付御沙汰も無之儀之處、更ニ冥加金相納候得は、自然右助成地え罷出輕營致し候ものまでも出銀相掛り、却而小前窮民共難渋可致候間、冥加金上納之儀は不被及御沙汰旨申論、願書下遣可申哉、相伺申候但本文助成地従前之姿ニ被差置候得は、出火出水等無之平年は、平均金九拾兩余受負人共助成所徳ニも相成候趣ニ付、右内年々金五拾兩宛為冥加上納為致候而も可然哉、尤右之通被仰付候ハ、冥加金は、助成地借受營業致し居候小前之もの共へ出銀不相掛様申渡置可申候

巳十二月

出火出水為請負助成橋之東西広場御渡被置候儀ニ候處、余徳有之候連、冥加金為指上候而は、於筋合不可然、本文之方可然奉存候、尤但書之通、多分之余徳為取置候も不都合ニ候得は、取調之上請負助成場所減少いたし、余分之場所は最奇町々え御預ケ相成、相当之地税上納為致候方、可然奉存

園 三

乍恐書付ヲ以奉願上候

一、両国橋東西橋番請負人并水防請負人一同奉申上候、私共儀、御橋東西広場拝借助成地上り高ヲ以、御橋御用相勤來難有仕合奉存候、然ル處、今般諸向御改正相成候ニ付而は、右両国御橋東西助成地之儀、私共起立已來御受負相勤罷在候ニ付、従前之儘ニ差置被下置候得は、其日稼之者共營業ニも不相離、難有仕合奉存候、然ル上は、

右為冥加、壹ヶ年金貳百五拾兩年々上納仕度、尤御橋御用相勤、東西橋番所中番御詰所新規御修復共、自分入用ヲ以補理、出火満水諸事共人足差出防方相勤可申候間、何卒格別之以御慈悲、此段願之通被仰付被成下置候様奉願上候、以上

明治二巳年八月四日

兩國御橋東橋番請負人

本所小泉町

家主

願人

庄 助印

同所相生町四町目

家主

同

庄 藏印

同西橋番請負人

米沢町壹町目

家主

同

治郎兵衛印

同町平兵衛地借

同

五三郎印

同水防請負人

米沢町壹町目

家主

同

五兵衛印

同

仁兵衛印

同

同

治郎兵衛印

同町兼吉地借

同

利右衛門印

右町年寄

同

久藏印

東京御府

兩國橋東西助成地納納金之儀取調申上候

小 西 喜左衛門

兩國橋東西橋番水防請負人助成地之儀、是迄渡錢之助成ヲ以、橋番所新規修復、番人給分并出火出水之節防方、其外右橋附之御用相勤罷在候処、今般諸向御改正ニ付、右場所之儀從前之儘被差置被下度、左候得は、為冥加壹ヶ年金貳百五十拾兩ツ、年々上納仕、御用向之儀は是迄之通り相勤申度段奉願上候ニ付、右上納金高不相当之儀無之哉御尋ニ付取調候処、左ニ申上候

五ヶ年平均壹ヶ年分

一、金九拾三兩

東橋番助成地上り高

内 五ヶ年平均壹ヶ年分

金七拾四兩銀壹匁五分

諸入用掛り高

差引

金拾八兩三分式朱銀六匁

請負人助成

同断

一、金百五兩銀三匁七分五厘

西橋番助成地上り高

内 同断

金八拾兩貳分銀三匁

諸入用掛り高

差引

金廿四兩貳分銀七分五厘

請負人助成

同断

一、金百廿五兩壹分

水防請負人助成地上り高

内 同断

金七拾四兩貳分三朱銀壹匁五分

諸入用掛り高

差引

金五拾兩貳分銀貳匁貳分五厘

請負人助成

三口

ノ 金九拾四兩銀壹匁五分

請負人助成

右之通五ヶ年平均請負人共助成之高取調候処、右助成之高にては、今度相願候上納金等差出候儀ニは到り申間敷候得共、右場所之儀は家作地ニ無之、葭竇張掛床重にて、是迄地代一ト坪当り等差定候儀無之、凡壹匁四五分より式匁位迄、場所之甲乙ニ寄悉不同有之候間、今般貸附方相改候ハ、上り高も相増、且入用掛り高も、近年之処ニ而は出水等度々有之、又は橋御修復等にて格外相増候得共、平和之年柄ニ候得は、本文之人用掛り高ハ相減可申見込之様相聞候間、願高より今少々増方被仰付候共、差支有之間敷奉存候、且又右場所え罷出香具、見世物、其外水茶屋又は煮売商等致し候者ハ、近辺裏屋住居之者共にて、日々右場所ニ而輕營致し候ニ付、同所家作地等ニ相成候而は營業離れ候間、地代等聊相増候共、右場所ニ不相離取続相成候儀ヲ相好、受負人共ニおゐても、町並之家作地ニ相成候而は、地代等は相増可申候得共、是迄橋附諸入之外町入用諸出銀相掛り、却而上納高も相減し、其上小前之者も難渋可致と、従前之姿にて差置度と上納金申立候様相聞申候、以上

巳九月

中年寄 小 西 喜左衛門

本文上り高諸入用掛り高共、昨辰年は出水并橋御修復有之、其上東西橋番所塗屋ニ被仰付、右入用多分ニ相掛り、助成地之内東西橋台ニ有之候葭簀張取払被仰付、地代上り高相減受負人共多分え出銀ニ相成候間、見合相成兼候間、去ル亥年より去々卯年迄五ヶ年之間平均高ニ御座候

(完)

本稿は、二〇一〇年度科学研究費補助金研究課題番号二〇五二〇五九一「近代移行期都市社会における社会的結合の変容」による成果の一部である。

(よこやま ゆりこ 本学非常勤講師)